

資 料

「概念フレームワーク」に関する先行研究調査(1)

市 川 紀 子

I はじめに

本稿は、CiNii Research¹を対象として「概念フレームワーク」を含む論稿が、我が国においてどの程度あるのかを把握し、どのようなキーワードと組み合わせられて使用されているのかの調査を行うものである。したがって「概念フレームワーク」に関する先行研究の調査と整理を行うことを目的としている²。なお、本稿は、あくまで資料にとどまるものであり、調査結果を分析する論稿ではない。

現時点(2024.01.17)において、「概念フレームワーク」をCiNii Researchにおいて検索すれば、892件の結果が抽出される³。件数の多さもあり、本調査に関しては、論稿を数回に分けて調査対象の整理の継続を検討している。本稿

1 CiNii Research [2024] は、国立情報学研究所では、研究者や図書館員が文献情報を発見するための基盤としてCiNiiを提供してきたが、近年、オープンサイエンスの考え方が浸透し、文献だけでなく研究データやプロジェクト情報など、研究活動に関わる多くの情報が公開される傾向にあることを指摘する。その流れを受け、CiNii Researchを公開し、文献だけでなく、外部連携機関、機関リポジトリ等の研究データ、KAKENの研究プロジェクト情報などを含めて、シンプルなインターフェースから横断検索することができることになったことを述べている(CiNii Research [2024])。なお、CiNii Articlesは、2022/4/18にCiNii Researchに統合されている(CiNii Articles [2024])。

2 なお本稿は、NVivoなどを用いた定性データ分析は行わない。あくまで先行研究の整理にとどまる。

3 「概念的フレームワーク」(傍点・下線は筆者挿入)をCiNii Researchにて検索すれば、80件が抽出されたが(2024.01.17時点)、本稿においては取り上げない。

は第1回目の調査となる。なお、次章においては、「概念フレームワーク」を取り上げる理由と、先行研究レビューの意義について概要のみを示す。

Ⅱ 「概念フレームワーク」を取り上げる理由と先行研究レビューの意義

筆者は、これまで市川 [2010] においても、米国の「概念フレームワーク」に関する内容について検討し、「概念フレームワーク」を研究対象としてきた経緯があるため、当該研究の継続の一環として「概念フレームワーク」を取り上げたいと考えた。また、市川 [2023] において概念フレームワークの重要性について検討したことも、本調査を行う一つのきっかけとなったと考える⁴。市川 [2023] については次の通りである。「IASBにおいても概念フレームワークが開発され続けている『事実』からも、以前としてその重要性は失われてはいない。むしろ必要であるから、概念フレームワークはその可変性も含めて存在観を示していると考えられる。しかし、概念フレームワークの性質そのものは、果たしてどのようなものなのか、概念フレームワークを設定する貢献性とは何なのか、その検討がなされるべきであろう。なぜならば、概念フレームワークは『会計基準の概念的な基礎を提供』(v頁)するものであり、会計基準の概念的な基礎を設定する意味を問うことは、今後の会計基準制定活動にも多大な影響があるためである。」(市川 [2023] 134頁)として、概念フレームワークの貢献性について検討を行った。とくに市川 [2023] においては、具体的には藤井 [2016] を引きながら、「概念フレームワーク」の特質を確認し、藤井 [2016] が指摘する「概念フレームワーク」の重要性(貢献性)について検討を行っている(市川 [2023] 134-136頁)。なお、筆者は藤井 [2016] が述べる「概念フレームワーク」の特質について賛同するものである。

このように「概念フレームワーク」の重要性などに関して検討を行ってきたが、重要性を謳うのであれば、また、その貢献性を示すのであれば、我が国に

4 改めて、市川 [2023] を執筆するきっかけを頂いた会計理論学会スタディ・グループの代表である岩崎勇先生、「概念フレームワーク」の重要性について御教示を授けてくださった藤井秀樹先生、また本スタディ・グループの先生方皆様に感謝を申し上げる。

「概念フレームワーク」に関する先行研究調査(1)

において個人研究を含む「概念フレームワーク」の研究が、どの程度行われているのかを調査すべきなのではないか、という動機をもつに至った(市川 [2010] および市川 [2023] においては、当該調査は行っていない)。

どのような分野においても先行研究を確認し、その検討結果や調査結果から得られた内容をもとに、新たな研究成果の導出に繋げていくことは重要なことである。その点については、徳賀・大日方 [2013] は「長期にわたる研究の蓄積を有する財務会計分野の場合、ごく限られた例外を除いては、先行研究の助けを一切借りずに何らかの新たな含意を引き出すことは不可能といってよい。明確な自覚の有無にかかわらず、財務会計分野の研究者は、主題、仮説、研究対象、分析手法など、研究全般に関する多くの知識を先行研究に負っている。無から有を生み出すような研究は、現代においては考えにくい」(徳賀・大日方 [2013] 14頁)と指摘されるとおりであり、その考え方に賛同するものである。

Ⅲ 「概念フレームワーク」に関するCiNii Researchを対象とした先行研究調査

本稿は、冒頭で述べたとおり、CiNii Researchを対象として「概念フレームワーク」を含む論稿が、我が国においてどの程度あるのかを把握し、どのようなキーワードと組み合わせられて使用されているのかの調査を行うものであり、「概念フレームワーク」に関する先行研究の調査と整理を行うことを目的としている。現時点(2024.01.17)において、「概念フレームワーク」をCiNii Researchにおいて「すべて」をセレクトして検索したところ、892件が抽出された。当該検索において、題目内に「概念フレームワーク」を含まない論稿も存在するが、左記に抽出された結果すべてを調査対象としている。

これらの892件の結果のなかから、「概念フレームワーク」がどのようなキーワードと共に使用されているのか、調査した結果が下記の図表となる。横軸は年代、縦軸は「概念フレームワーク」という文言と共に、使用されていたキーワードを並べたものであり、数字は使用頻度となる。なお、使用回数が下記に示した対象年数期間内において、合計1回以下のもは当該図表から除いている。また、文言の概念は同一であるが、呼び名が異なるものについては同一欄にまとめている場合がある(例えば「資産負債アプローチ」と「資産・負債アプローチ」)。

キーワードは基本的に一般的な名詞を抽出し、必要に応じて固有名詞を抽出した。なお、動詞や助動詞などは原則として省いている。図表におけるキーワードのリストは基本的に欧文表記・年度・日本語表記の順番で並び、それぞれアルファベット順・50音順等で表記している。なお、892件のうち、直近の2019年～2023年の5年間を対象としており（それ以外の年代は別稿に譲る）、題目数は122件であった。この122件の内訳に関しては、2019年は32件、2020年は31件、2021年は15件、2022年は29件、2023年は15件となる。なお、当該期間のキーワードの合計数は267件であり、内訳は2019年は52件、2020年は71件、2021年は34件、2022年は78件、2023年は32件である。

図表 CiNii Researchを対象とした2019-2023年のキーワード使用頻度(2024. 01. 17現在)

	2019	2020	2021	2022	2023	合計
ASBJ	0	0	2	0	0	2
FASB	4	3	4	7	7	25
IASB	7	8	3	6	3	27
IASB/FASB	0	0	0	2	0	2
IFRS	3	4	0	0	1	8
IFRS基準	0	1	1	1	0	3
IFRS財団	1	1	0	0	0	2
IASB情報	1	1	0	0	0	2
IFRS第3号の修正	1	1	0	0	0	2
IPSASB (国際公会計基準審議会)	2	0	1	0	0	3
1974年	1	2	0	0	0	3
2010年	0	0	1	2	0	3
2018年	2	1	0	2	0	5
赤塚尚之	0	0	0	2	0	2
意思決定有用性アプローチ (意思決定・有用性アプローチ)	1	1	0	0	0	2
一考察	1	2	0	0	0	3
会計	1	1	0	1	0	3

「概念フレームワーク」に関する先行研究調査(1)

会計基準	1	0	0	1	2	4
会計理論	1	1	1	0	0	3
改訂	0	2	2	2	2	8
概念レベル・基準レベル	0	1	0	2	0	3
関係	1	1	2	2	1	7
基準	0	0	1	1	0	2
金融商品	0	2	0	0	0	2
形成過程	0	0	0	2	1	3
見解	0	2	0	0	0	2
研究	0	0	0	5	0	5
検討	0	2	0	0	0	2
公表	0	1	1	1	1	4
考察	0	1	0	2	0	3
国際会計基準	2	1	0	0	0	3
コメント・レター	1	1	0	0	0	2
財務諸表の諸要素	0	0	2	0	0	2
財務報告	3	2	1	0	0	6
資産除去債務	0	0	0	1	1	2
資産負債アプローチ (資産・負債アプローチ)	0	1	0	0	1	2
質的特性	0	4	0	1	1	6
情報のセット	0	0	0	2	0	2
情報セットアプローチ	0	1	0	3	0	4
新	3	0	1	0	0	4
信頼性	0	0	0	2	0	2
収益認識	2	3	0	0	0	5
設定過程	0	0	0	2	0	2
相違	0	0	0	2	0	2
測定基礎	0	2	0	0	0	2
中国	1	0	0	1	0	2

中心	3	5	3	1	1	13
討議資料	2	2	0	0	0	4
統合への道	0	2	0	0	0	2
内部ロビング	0	0	0	2	0	2
二重規制システム	0	0	0	2	0	2
認識	0	0	0	0	3	3
認識の中止	0	0	0	0	2	2
反映	0	1	1	1	1	4
比較検討	2	0	2	0	0	4
引当金会計	0	1	0	2	0	3
表示	0	0	0	2	0	2
プロジェクト	0	0	2	1	1	4
分析	1	2	0	3	0	6
変更	0	1	1	1	1	4
変容	0	1	1	0	0	2
メンバーの人事異動	0	0	0	2	0	2
目的適合性	0	0	0	2	0	2
要求	0	1	1	1	1	4
予備的検討	1	1	0	2	0	4
利益概念	3	0	0	1	1	5
合 計	52	71	34	78	32	267

出所：CiNii Researchをもとに筆者作成。

IV おわりに

冒頭で述べたとおり、本稿はCiNii Researchを対象として「概念フレームワーク」を含む論稿が、我が国においてどの程度あるのかを把握しながら、どのようなキーワードと組み合わせられて使用されているのかを調査し、「概念フレームワーク」に関する先行研究の調査と整理を行うことを目的とした。あくまで整理が目的であり、資料にとどまるものであるため、調査結果の分析については別稿に譲るものとする。

「概念フレームワーク」に関する先行研究調査(1)

892件の抽出結果のなかから、「概念フレームワーク」がどのようなキーワードと共に使用されているかの調査結果を、本稿では図表として一覧表にまとめている。ただし、892件のうち、2019年～2023年の5年間を対象として（題目合計122件、キーワード合計267件）、うちキーワード使用回数が合計1回以下を除いて調査した。なお、1回以下は241件存在している。

以上のことから本稿においては、892件のうち122件を対象とした調査であったため、残りの件数についても調査する必要がある、それは今後に行う予定である（冒頭に述べたとおり本稿は数回に分けて調査研究するものである）。また、調査結果を用いて、「概念フレームワーク」の論稿に関する特性、およびその貢献性についての分析については、今後の検討課題としたい。

参考文献等

- ASBJ [2006] 「討議資料『財務会計の概念フレームワーク』」。
- CiNii Articles [2024] 「CiNii Articlesを使いこなすために」 2024. 01. 17参照, 〈https://support.nii.ac.jp/ja/cia/manual_outline〉。
- CiNii Research [2024] 「CiNii Researchについて」 2024. 01. 17参照, 〈https://support.nii.ac.jp/ja/cir/manual_outline〉。
- FASB/IASB [2010] *Conceptual Framework for Financial Reporting: Chapter 1, The Objective of General Purpose Financial Reporting, and Chapter 3, Qualitative Characteristics of Useful Financial Information*, SFACNO. 8, FASB; IASB [2010] *The Conceptual Framework for Financial Reporting*, IASB.
- IASB [2008] Discussion Paper, *Preliminary Views on Revenue Recognition in Contracts with Customers*, IASB.
- IASB [2014] IFRS No. 15, *Revenue from Contracts with Customers*, IASB.
- IASB [2015] Exposure Draft, *Conceptual Framework for Financial Reporting*, May, IASB.
- IASB [2018] *Conceptual Framework for Financial Reporting*, March, IASB.
- 市川紀子 [2010] 『財務会計の現代的基盤』 森山書店。
- 市川紀子 [2020] 「改正収益認識会計基準等と概念フレームワークの関係性」 『会計』 第198巻第5号, 72-86頁。
- 市川紀子 [2023] 「わが国の収益認識会計基準をふまえた概念フレームワークの重要

性と可変性」『収益認識についての総合的研究』（会計理論学会スタディ・グループ（代表：岩崎勇）最終報告書），133-144頁。

徳賀芳弘・大日方隆 [2013] 『財務会計研究の回顧と展望』中央経済社。

藤井秀樹 [2016] 「概念フレームワークの理論的性質と役割—アメリカ会計理論発達しにみる規範理論の展開—」『産業経理』第76巻第3号，4-14頁。

以上